校長室だより～燦燦～ №８０２

研究作品

2023.7.26

小学校と中学校では、毎年、どの学校でも研究作品をまとめている。内容は、研究主題や副主題を設定し、研究仮説をもとに、検証授業を行い、仮説の有効性を検証していくというスタイルが多い。教育論文の形式をとった実践記録となっている。各学校にとっては、その年のアルバムのようなものだろうか。

このような取組が、先生方の授業力向上につながり、授業レベルが保たれるという一面もある。また、教員は、絶えず研究と修養に努めなければならないことが、法令に定められているため、毎年、研究をするのは当たり前とも言える。

問題は、この研究作品の提出時期である。１年間のまとめであるためか、１月上旬の提出が多い。検証授業も９月から１１月に集中しがちである。ということは、２学期末から年末年始にかけて、まとめの作業を行うことになる。以前から、この強行日程をどうにかしたいと考えていた。

中学校の場合、３年生のスタッフにとっては、進路事務が本格化している時期と重なる。研究作品の方に重点がいくとは考えにくい。３年生以外の先生方も、１２月末に研究作品の原稿を提出して、さっぱりと年末を迎えたいところだろう。ところが、終わらないと、もやもやしたまま年を越すことになる。

そこで、野田中学校では、昨年度、１学期のうちに２回の研究授業を行い、夏休みのうちにまとめまで終わらせませんかという提案をした。これに反応し、実際に夏休みのうちに終わらせた先生がいた。その方は、３年生の担任で、進路指導主事を務めていた。進路事務が本格化する２学期からのことを考えて、１学期と夏休みで終わらせたのである。頭ではやろうとしても、なかなかできることではない。おかげで、その方の提出原稿が、まとめのモデル、サンプル、ひな型となった。

このやり方を、今年度は、もっと広げようと考えている。今年度の計画だと、１学期のうちに２回の研究授業を行う先生が多くなる。したがって、夏休みのうちにまとめを行うことが可能である。これが実現できれば、今までとは違った年末を迎えることができる。

これは、生徒にとってもいい。先生方が研究授業を行えば、授業の質は上がる。それは、２学期よりも１学期の方がいいだろう。１学期のうちに、少しでも生徒にとって魅力的な授業が展開され、その反省をもとに、２学期の授業が進められればいわけである。

この方法は、働き方改革にもなる。決して無理な方法ではない。先生方の意識の問題である。先生方が、そうするように促すのが、私の役目である。今まで、慣例的に行ってきたことを変えるのは簡単ではない。だが、やってみて、そのよさを実感できればどうだろう。新しいことを継続しようとするかもしれない。

今までのように、研究授業といえば秋という流れを変えて、１学期の授業を何とかしたいと思っていた。生徒にとっては、１学期の授業がだめであれば、２学期はない。果たして、夏休みが終わり、２学期が始まる頃には、どのくらいの先生方が、まとめの原稿を提出するだろうか。楽しみである。